のうりょくしゃ

達野なな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
のうりょくしゃ

【Ｎコード】
Ｎ５７９８Ｍ

【作者名】
達野なな

【あらすじ】
大阪の田舎に住む青年、清田は苦しみと絶望の中である力を得る。自分は、生きる価値のある人間なのか。将来への不安を抱えながら生きる意味を探していく。彼は答えを見つけられるのか。だが、やがて力は出会ってしまう本当の闇に。彼等の力は生まれるべくして生まれた力か、それとも異端の力か。

プロローグ

「すまん、ねぇちゃん」

男は続けた。

「金をくれ」

「えっ！」と受付の女性は、思いも寄らない言葉に驚いて一瞬動きが止まったが、

何か文字らしきものが書いてあるマスクを被っている風貌、そして男の手に握られているナイフを見て状況が読めたのだろう。少しの間をあけたあと、カウンターの下に右腕を伸ばそうとした。

その瞬間、女性の視界が遮られた。後ろにいた男の手が顔をわしづかみにしていた。

同時に声が聞こえた

「西口さん、お金、お願いしますね」

顔を掴んでいる手の間から、文字を確認できた。

一空一、最初に来た男は、と確認しようとした時、何も考えられなくなった。言葉も勝手に口をついて出た。

「はい」

「ありがとう」

そう言うと、西口と名札に書いてある女性は、つい先程とは別人のような表情、態度でカウンター内で機械を扱いだした。

そして、少ししてから男の元に歩いて来て言った。

「どうぞ」

微笑を浮かべながら、一万円札の束を持ってきた。見た感じで、ざっと五百万といったところか、金を受け取った男は周りを見渡した。

従業員が三人、客は近所に住んでいるであろう杖を持った年配の女性が一人。男達が入ってきた時は隣の受付で従業員の女性と話して

いた。
マスクを被った者が入って来たのである、もちろん隣の従業員の女性と客の女性も気付いたのだが、恐怖のあまり身体が固まってしまった。
もう一人の従業員は奥にいたが、こちらには全く気付いてはいなかった。
「よし、さっさとずらかるか。」　チラッと男は空と書かれたマスクの男を見た。
「後のことは頼むよ、西口さん」

そう言った空と書かれたマスクの男がもう一人の男と共に銀行の出口へ振り返り歩きだした

「女には何をしたんだ？」
車の中でマスクを脱ぎ、運転している男が尋ねた。
「えぇ、彼女に後片付けをまかせました」
そう言うと後部座席に座っている空のマスクを手に持つ男は微笑を浮かべた。それをバックミラー越しに見ていた運転している男は口元を緩め言った。

「楽しくなりそうだ」

想像者の力

学校への通学中の電車の中で清田はあの頃を思い返していた。
それは、なんでもない、いたって普通の毎日をすごしていた日々。
しかし、ある日、起こり始めた身体の異変によって崩れ始めた。
その異変により力が目覚めたのだ。
清田に力が目覚めたのは、二年前だ。
通信制高校に通っていた頃だった、このような力が出現するような特別な事など何もなかった。
ただ、清田自身では、自分の性格や考え方等が影響しているんだと思っている。
幼い頃から穏和で気の小さいな性格、人のことを想える優しい男である。
しかし、それが身体に負担として蓄積されてきた。
きっかけは些細な事だった、駅でうずくまっていた女性を看病した時、
貧血だったろうか、無事に回復したことを見届けたところ、安堵と共にふいに動悸がした。
冷や汗が出て、呼吸が苦しくなる。怖い、怖い、怖い。
今までに感じたことのない恐怖。死んでしまうと思った。
そのまま病院に運ばれた。病院で点滴を受けながら、しばらくすると大分落ち着いた。
先生は体に問題はないと。精神的なものらしい。
その日から、体、心との闘いが始まった。
一年間は家の外に一歩も出ることができなかった。呼吸が苦しく過呼吸や動悸に悩まされていた。
恐怖と闘いながら、将来の事を考えると絶望しそうだったが、
高校を一度辞め、再起をかけて入学した通信制高校への思いを呼び起こし、

清田は気力で再び学校に通い始めた。今では大学生だ。
よくここまでこれたなあと思っていると電車が目的地へ到着した。
学校は入学してから、まだ一週間なので授業は教科の紹介的な内容であったので、少し早く終わった。
友達もつくりたいが、なかなか話しかけれなかった。
「来週からは、もっと積極的にいってみようかな」
清田は小言でつぶやきながら、まっすぐ家路についた。
家に帰ると、お風呂に入り、ご飯を食べながらテレビを見ていた。
全国ニュースが終わり、その後の関西のニュースが流れていた。家の近所が映っていた。
歩いて5分くらいのところにある郵便局である。
三日前にニュースで強盗があったと流れたばかりだが、また何かあったのかと見ていたが、
どうやらその郵便局にお金が返されたそうだ。
「えっ！！どういうこと？」と一緒にニュースを見ていた母と顔を見合わせた。
「何がしたかったんやろ」清田の問い掛けに
「何やろなあ？」と母も答えるしかなかった。
自分達のしてしまった事に後悔したのか。ニュースが終わり、天気予報のコーナーが始まった。
そこで清田は、画面を注視した。画面の向こうでは、明日は雨が激しく降る恐れがあると伝える女性が。お天気キャスターの吉川佳奈だ。清田は言った。
「よっし～！」
「よっし～かなんかしらんけど、それより勉強でもしいや」
母のつっこみが入った。
「はい、勉強します」
清田は自分の部屋に冷蔵庫からスポーツ飲料のペットボトルを持って入った。

机にペットボトルを置き、床に座ってあぐらをかくポーズになった。目を閉じ、息を整え、右手に意識を集中している。１０分くらい経っただろうか、清田は目を開けると立ち上がり、机の上のペットボトルを左手でとり、半分くらいを一気に飲み干してから右手に持ち替えた。
右手に集中し、しばらく握り、机に置いた。
「まだまだやな～」
そう言って首を降りながら、周りに水滴がついたペットボトルを残し部屋を出た。

導かれしもの

ビルを出て、駅に向かう道中、二人は後ろを振り返ることなく話し始めた。
「奴らはまだ信用してないみたいですね」
若く爽やかな顔立ちの男が言った。
「まあ、あの規模では一回で信用はできんってことやな」
スーツのボタンを外しながら、もう一人の短髪のガッシリとした体格の男が答えた。
「はぁ～、どうします？」
「でかいとこ行くしかないやろな」
「でかいとこっていうと？」
「そやな～、銀行なら本店クラス、それか現金輸送車とかか？」
「でも、厳しいですよね、奴ら何をやろうとしているんだか」
「裏社会の支配か、もしくは…日本を」
一瞬緊張感が張り詰めた。
「そうだったら、大変なことになりそうですね」
「やらせはせえへんよ」」
その返事に呼応するかのように短髪の男も
「もちろんです」と力強く答えた。

駅から地下鉄御堂筋線に乗り、難波に着いた。
「空…いや、和也、腹減ってるか？」
体格のいい男が呼びかけた。
「ますね、かなり。」
和也と呼ばれた男は笑顔で答える。
「それじゃあ、ここで食べましょうよ」
和也は、難波駅近くにある大きなビルを指さした。
「美味しい韓国料理屋があるんです」

「あんまり食べたことないけどまあええわ、案内頼んますわ」
そう言うと、和也の両肩を握りしめた。
「痛っ！力がハンパないですから」
和也は、本気で痛がった。
「おっ、少し筋肉付いたか？まだまだやけどな」
楽しそうに笑いながら後ろにいる男に和也が言った。
「ひろさん、加減して下さいよ。のうりょくの方もですけど…、あと、コードネームで呼ぶの治ってませんね」
「あぁ、訳分からんようなるんよ」
「まぁ、ややこしいっちゃ、ややこしいですけど、真一さんが言ってたでしょ、用心しろって」

ふぅとため息をつきながら、ひろは若干うんざりしながら言った。
「そうやな。ところで店はどこにあるんや？」

「あぁ、ここですよ！よし、すいてる。」
ビルの8階にある韓国料理のチェーン店に入り、席についた。
客は見たところカップルが一組だけのようだ。

「何食べよかなあ、よし、ビビンバにしよ、ひろさんは？」
「同じので」
和也は手でウエイトレスに合図をし呼んだ。
「はい、御注文お決まりでしょうか？」
若く可愛らしい女性が注文を取りにきた。
「あの、石焼きカルビビビンバを二つと、海鮮チヂミで」
ウエイトレスが注文を確認し、厨房へ向かって行くのを見ながら、和也はひろの方を見た。
「あの娘、可愛いですね！ユンさん。留学生かな？う～ん、可愛い」
「告白してこいよ」
「無理ですよ、振られますから。一度でいいから女性とお付き合い

したいですよ〜」
うなだれながら、テーブルに身体を預けていた和也だが、
「あっそうだ、ビビンバってピビンバって言うんですよ〜、少し授業で韓国語習ってたんですよ」
「そうか」
ひろは、素っ気ない返事を返した。
そうこうしている間に料理が運ばれてきた。
二人は特に話しをすることなく料理を平らげた。勘定を終え、店を出た。
「美味しかった〜」
そう言いながら和也は、先程から気になっていたことを確認するかのように後ろを見た。
横では、ひろが同じ方向、店の中を見つめていた。

初めての出会い

窓から入ってくる、暖かい日差しに、清田がうたた寝をしかけていると、一限目の授業が終わった。
続けて同じ授業があるので、二限目が始まるまで休もうと、机に体を突っ伏していた。
少し経った頃、隣の方から椅子に座る音が聞こえたので、清田は何気なく目をやった。

少し焦った様子の女性が席についていた。
鞄からノートと筆箱を取り出し、しきりに前方にある黒板に目をやっている。
しかし、この授業を教える教授は黒板に書く量が多く、
スペースがなくなると消していたので内容はよくわからなくなっていた。
清田も、あまりの本格的、いや、殺人的文字数に驚きと、手首の心配をしたほどだった。

女性は、諦めたのか、静かに座っていた。
周りを見渡していた、友達を探しているのか、それとも授業の内容を気にしていたのかわからなかった。
しばらく様子を見ていたが、もし困っているとしたらかわいそうだと思い、清田は思い切って声をかけてみた。
「すいません」
ビクッ！と体を反応させ女性は清田を見た。
「あの、ノート写します？」見ず知らずの男にいきなり話しかけられたのである
当然一瞬驚いたがすぐに、
「ありがとうございます！助かります！」

と笑顔で応えた。
正面から女性を見ると、可愛らしい顔立ちに魅力的な笑顔の持ち主だった。
少しみとれていると
「うん？」
と女性がそれに気付き顔を見てきたので、少し取り乱しながら
「あっ、どうぞどうぞ」
とノートを差し出した。
ノートを写している間も、気になってはいたが、机に突っ伏していた。
まだ写し終わってないところで二限目の授業が始まったので、授業が終わってからまたノートを貸すことにした。
授業が終わり、またノートを貸した清田は決心していろいろ話しをしてみることにした。
「あの、えっと～、何さんですか？」
「えっ」
女性は少し驚いたが、笑みを浮かべて、
「ユン・ハンナです」
名前を聞いても清田に驚きはなかった。
アジア、その中でも、日本人、韓国人、中国人、台湾人に関しては、見た目で判断できるという自称特技？を持っているからだった。
「僕は清田和哉です。えっと韓国の方ですか？」
「はい、留学生です」
「日本語すごく上手ですね」
わずかに訛りがあるが、違和感なく日本語が聞けるレベルである。
「ありがとうございます！あっ、ノートありがとうございました」
使い分けもバッチリできている。
頭が良いんだろうなあとうなずきながらしみじみ思っている清田。
それを見て、ユンは微笑んでいる。
「清田さん、面白い人ですね」

「えっ！そうですか！？あ～なんか恥ずかしいなあ」
そう言うと二人で笑った。
あっという間に休憩時間も半分を過ぎていた。時計を見て、ユンは言った。
「あっ！時間が。授業大丈夫ですか？私、次はないんです」
「えっと」
時間割りを印刷した紙をリュックの中を掻き回しながら探しだし見る清田。
「あっ。僕もないです。次は四限目ですね。昼があるから、待つ時間が長いです。やることがないのでちょっと退屈です」
そう言う清田にユンは
「それだったら、私、これから留学生の人達一緒に清田さんも来ます？」
「えっ！いいんですか？」
授業までの長い時間の使い方が全く白紙だった清田にとって、その提案は嬉しいものだった。
さらに、友達をつくりたいという気持ちもあるのだ。
「いいですよ！私も一人だと緊張するので、あとお礼もしたいし」
「いえ、お礼なんていらないですよ！誘ってもらって嬉しいです。あっあの僕、別に変な人じゃないですから。変な人？やな人？何ゆってんやろ。自分でもわからんようになってきた」
清田は自分で言って自分で勝手に焦っている。
それを呆気にとられて見ていたユンだが、
「ははっ！」と笑顔で見つめ
「清田さん、やっぱり面白い。それに優しい人。もうお友達ですよ」
そう言う、ユン・ハンナは清田には天使に見えたようである。
「ありがとうございます。はい、もう友達です。あっ、僕は清田和哉なので、清田と呼びすてでも和哉でも呼んでください」ユンは頷きながら言った
「それじゃあ、かず君と呼びますね。私は友達にはハンナと呼ばれ

ていますが、何でもいいですよ」
「う～ん、それじゃあ、ハンナちゃん…ハンちゃんで」恐る恐る顔を向けると、
「はい、いいですよ」
と言うユン改めハンの笑顔にまた癒される清田ことかず君であった。

破滅への潜入

大阪府中央区難波駅を出たところでは、昼休憩で昼食を食べに行くサラリーマンやＯＬ、
遊びに来ていた若者などが集まっていた。テレビ局のカメラマンもいる。
すでに警察によって現場は立入禁止になっている。
加藤正義は、銀行の中から外の様子を見ていた。
「騒がしくなってるな」
この銀行はビルの中にあり、ＡＴＭが数台とカウンターが一つ、敷地も広くはない。
「こういう銀行があったんか、知らんかった」
頭をかきながら再度、銀行のカウンターに向かった。
カウンターにいる女性にもう一度聞いた。
「ほんとに返すって言ったんだね？」
「はい、すぐ返すから心配しないでって…」
加藤はため息をつきながら首を振った。
自分はここで働き始めて３０年だが、ここまで意味がわからない事件はない。
犯人は、現金輸送車から店内に運ばれてきた金を奪い何もなかったかの如く帰って行ったらしい。
しかも、脅しもせず…。
「一億取って、すぐ返すか…どういうつもりなんや」

受け付けにて用件を言い、しばらく椅子に座っていた。
「坂本弘幸様、本城和也様」
名前が呼ばれ、椅子から立つと、
「ご案内します」

と二人いた受け付けの女性の内の一人が先に歩き始めた。
そこからエレベーターで１５階につき、フロアに出ると、
少し広い空間になっており、正面奥にはソファーが二つあり、
男が一人座っている。置かれているテレビを見ている。
「こちらです」
女性に促され、右側の通路に歩き出す和也とひろ。
和也はソファーの男の後ろ姿を一目見てから視線を前にもどした。
通路を進んだ先に部屋があった。女性がノックすると、
「どうぞ」と中から男の声が聞こえた。
ひろがドアを開け、中に入る。それに和也も続いた。
部屋に入ると、スキンヘッドの男が部屋の奥にある椅子に腰掛けていたが、
こちらを見て二人を確認すると、笑みを浮かべた。
「すばらしいよ！君達の活躍ぶりはテレビで見たよ。現金輸送車から取ったんだって？」
男は立ち上がって部屋の中央に歩いてきた。テーブルを挟んで奥のソファーに座った。
そして、二人にも手で座るよう促していた。
ひろはすっと座り、和也も頷きながら座ったが、
一瞬、ゾッとするような寒気を首筋から背中にかけて感じた。
和也はすぐに部屋の中を見渡した。
すると、部屋に入って来てから今まで気付かなかったが、後ろに人の気配がする。
確かにいる。和也はひろをチラリと見たが、ひろは特に気にしているそぶりは見せてはいない。
ひろは、正面に座っている男に言った。
「これで組織に入らして頂けますか？」
男は笑みを浮かべながらひろを見た。
「もちろんだとも、もう君達は同志だよ！」
そう言うと握手を求めてきた。ひろはそれに応じた。その様子を鼓

動を高鳴らせながら和也は見ていた。次いで和也にも手を差し出してきた男に、和也は胸の内の動揺とは打って変わった冷静さを装って応えた。
「これから何をしたらよろしいんですか？いや、それ以前にこの組織の計画を教えていただきたいんですが…」
ひろは真剣な顔で聞いた。男の眉毛がピクリと動いた。
「聞いてないのかい？」
「ええ、優秀な人材を探している組織があるとしか聞いていません。
「フッフッフッ」男は堪えられずといった様に笑った。そして、言ってのけた。
「革命だよ、坂本君」
「革命？ですか…」ひろは怪訝な顔をした。
「まあ、それはおいおい話していく。とりあえず、待機していてくれ。用件があれば連絡する」
「了解しました。連絡は深沢さんからですか？」
男は首を横に振った。
「いや、申し訳ないが私は少し忙しい身分でもあるものでね。連絡は、後ろにいる秘書の古賀がする」
ひろと和也は、ようやく後ろを振り向き先程からの気配を確かめた。そこには女性が一人立っていた。二人と目を合わせると、会釈をして言った。
「古賀春香です。よろしくお願いします」
和也は、戸惑いを感じていた。この女性が先程の気配を出していたのかと。
「わかりました。連絡を待ちます。今日はこれで失礼します」
ひろが席を立った、和也がそれに続く。
「そうだ、お金はどうするんだい？」
深沢が興味深そうにた尋ねてきた。
「返します」
「貰えばいいのに、君達の戦利品だよ」

「なんというか、信念みたいなものです」
「そうか、確かに信念は大事だ。あっでも返す時に捕まらないでくれよ。大切な同志なんだから」
ひろは苦笑しながらドアへ向かう、和也も慌ててついていく。
「それでは、失礼します」
「ああ、ご苦労様」
二人は会釈し、ドアを開け、部屋から出た。
テレビを見ながらソファーに座っていた男は、まだいたが、気にせずエレベーターに乗り込んだ。
そこから二人は、ビルから出るまで一言も言葉をかわさなかった。
1階に着きビルから出た時、前方から二人の男女が歩いて来た。
男と少女？だろうか。すれ違い様に、和也に少女がぶつかった。
「あっ！ごめんね。大丈夫？」
心配そうに見つめる和也に少女は頷く。
「大丈夫」
そう言うと男とビルの中に入って行った。
ひろは、何か考え込んでいる
「今の男…どこかで見たことがあるような…思いだせん。ただ、相当な奴なことは確かやけどな」
「ですね」
和也は同意した。
「今日は、とりあえず成功したんですよね？」
「まあ、そうやな」
それを聞いた和也は満面の笑みを浮かた。
「じゃあ、お腹空いたんで韓国料理でも行きましょうか？」
「またかよ…、まあいいけどな。その前に報告しとかないとな」
二人は、駅に向かって歩き出した。
ビルのエレベーターの中には男と少女がいた。
「さっきの人達、私達と同じ用事だったゆたい」
少女が男に言った。

「そう。なら、またどこかで会うことになるだろうね」
男がそう言い終えた時、エレベーターは１５階で停まった。

先生の力

「先生！武藤先生！！」
女生徒が教室の前方に集まっている。
「先生、彼女いるんですか？」
「いないよ」
「何歳なんですか？」
「３０才」
「先生の他の授業も受ける～」
「ありがと」」
生徒が矢継ぎ早に質問を繰り出していた。
「はいっ！休憩時間ももう終わるよ！授業行きよ～、僕も用事があるから行くよ～、ハイッ行って行って」
そう言って、生徒を移動させた。遠くからは、先生可愛い～という声が聞こえた。
「もてますね、先生」
教室を出ると、隣の教室で授業をしていたマクロ経済学の井田寛が声をかけてきた。
「いや、最初だけですよ。あと、テスト期間中と。都合よく使われてるだけですよ」
武藤は苦笑しながら言った。
「僕もテスト期間中だけもてますね、最初は勘違いしかけましたが、今は使われてると自覚してます」
井田は肩を落としながら言ったが、すぐに笑いだした。
二人は歩きだし教員室に向かう為、エレベーターの前でエレベーターが来るのを待っていた。
その二人の様子を遠くから見つめる男がいた。いや、二人というより武藤を見ている。
エレベーターが着き、ドアが開いた。その時、武藤が後ろに振り向

き辺りを見渡した。
「どうしました？」
「いえ、何か落としてないかなと思って。大丈夫でした」
「じゃ、行きますよ」
武藤はエレベーターに乗り込んだ。その顔は、一瞬厳しい顔つきとなった。
大学の経営学部棟２階２－２３０教室の１番後方の席に座る女子数人が困惑した表情で話し合っていた。「なあ、志保どうしたんやろ」と一人が言えば
「なんか性格変わってない？」
さらに別の女子が言う
「いや、性格どころか服装とか髪型まで変わってるよ。そこも気になるけど、１番は何であの男なん？あんなん、最低やって言ってたのに」
彼女達の目線の先は、教室の前方窓際の席。
茶髪の男女が体を寄せ合い、いちゃついている。女の名前は牧野志保。
大学に入学して、初めのオリエンテーションの時に近くにいた女子に積極的に声をかけていた。
一人で緊張していた彼女達はその行為に助かった。
彼女は話しをしていても嫌みを感じさせない人柄であり、すぐに友達ができた。そんな彼女が…。
黒髪は茶髪にカジュアルだった服装はギャル系になっていた。
しかし、友達たちが１番驚いたのは一緒にいる男。
それが、軟派な男、林正樹だったからである。
オリエンテーションの時、その男はすでに女といちゃついていた。
そして、それから数日の間にすべて違う女を連れていた、いや、従えていた。
その様子をみんなで目の当たりにしていたのだ。
何股かけているんだろう、最低だねと言う話しを牧野も確かにして

いた。
いや、まだ知り合って数週間、実は牧野はこういうことも平気な人物かもしれない。
授業が終わっても二人は席を立とうとしない。
「い…いこっか」
山口理恵が声をかけ、彼女達は教室を出た。その様子を林正樹はじっと見ていた。
次の授業の関係で彼女達は各自別れ、今日の授業が終わりの山口理恵と佐藤麻美は二人になった。
二人は牧野とは特に仲がよかった。メールもよくしていたし、学校でも一緒に受ける授業が多かった。
それだけにショックは他の子達より大きいものなのだ。
「理恵ちゃん、ちょっとトイレ行ってくる」
「わかった。待っとく～」
山口理恵はトイレの前で脚をクロスしながら立って待っている。
そこに、授業が終わった武藤が通りかかった。
「あっ！武藤先生～！！こんにちは！」
笑顔がはじける理恵。
「こんにちは、山口さん。あれっ、今日は一人？」
「佐藤さんと一緒ですよ～、でも…」
一転して表情は暗くなった理恵。
「ん？どうかしたの？」
「牧野さんがなんか急に変わっちゃったっていうか…、メールも返ってこないし、学校でも喋ってくれなくなって」
「う～ん、それは一体どうしたんやろう？あの牧野さんが」
そこに麻美がトイレから出て来た。
「武藤先生～！！」
麻美も笑顔が満開だ。
「佐藤さん、こんにちは」
「先生、次は授業ですか？」

理恵が興味津々な様子で聞く。
「今さっきの授業で今日は終わりだから、帰るかな」
「おっ！私達も帰りなんです。先生、駅まで一緒に帰りましょうよ」
「えっ！いや、お二人でお帰りになられたらどうでしょうか？」
独特な言い方に麻美は笑った。
「帰りましょうよ～、女の子二人じゃ危ないですよ～」
理恵は駄々っ子みたいに言った。
「わかりました、駅まで行きましょう」
武藤は観念した。
「ちょっと荷物を取ってくるので待っていてもらえますか？」
「は～い、じゃあ下で待っときますね」
そう理恵が応えると、二人は階段で下に、武藤はエレベーターで教員室へ向かった。
経営学部棟の一階には、生協の売店や自販機等があり、その向かいにはベンチが何個か置かれている。
理恵と麻美はベンチに座っていた。
「武藤先生って、やっぱカッコイイよね」
理恵が興奮気味に麻美に言った。
「そうだね、優しいしね」
麻美も顔が綻んだ。
楽しくてしかたない、まさにそんな時、二人の前で足音が止まった。

武藤は7階にある教員室にてカバンに荷物をつめ終え部屋を出て鍵を閉めていた。
そこに、麻美が走って来た。
「先生！助けて！！」
必死に走って来たのだろう、息があがっている。
その様子に武藤もただ事ではないと感じていた。
「佐藤さん、どうしたの？」
「理恵ちゃんが、林って人に連れていかれたんです！！！」

麻美は泣きそうな声になっている。
「何があったの？」
武藤は厳しい顔つきで聞いた。
「林っていう人が、いきなり来て、お前ら俺の女になれって言って理恵ちゃんの腕を掴んで抱き着いてきたんです。理恵ちゃんは、暴れて振り払おうとしてたんですけど、急に動かなくなってしまって、私、なんとかしないといけないと思って、先生に助けてもらおうと思って！」
「わかった！」
麻美の必死な言葉を噛み締めながら武藤は怒りのこもった厳しい視線を前方に送った。
そこには、一人の男が立っていた。
「きゃあああ！」
麻美が悲鳴をあげた。どうやら林正樹のようだ。
林の後ろには理恵と牧野志保がいた。
しかし、二人共こちらに反応を示さない。
「君か…」
武藤はつぶやいた。
「おうおう、色男先生ではないですか、どうしたんですか？そんな恐い顔をして」
林は大きな笑い声をあげた。
「「あっ、もう色男じゃないか、全員俺が貰うからなあ、おい女！お前も早くこっちにこい！！」
麻美は震えながら動けない。
「何が目的なのかな？」
武藤は冷静な声で聞いた。
「目的？女を手に入れたいだけじゃ、この学校のやつらはお前に群がってたのがムカついたからな、俺好みの女にしてやったったんや」
「その力は…どうやって？」
武藤は無機質な声で尋ねた。

「力？そう、俺はすごい力を手に入れた。女を好きにしたいとずっと思ってたら、超能力が宿ったわ」
静かに聞いていた武藤が口を開いた。
「そうか、本来、君みたいな想いの力で覚醒はしないと思ってたんだけど、偶然なのか、それとも…」「何ごちゃごちゃ言ってんだ」
林は武藤を睨みつけている。
「とりあえず、君は使い方を間違えた。それは君には必要のない力」
武藤の視線は冷たさを感じるぐらい鋭いものになった。
「何意味わからんことゆってんねん、勝手にゆってろよ、俺はそこの女を連れて遊びに行く、お前は消えろ！」
林はそう言うと、武藤と麻美に近づいてくる。麻美は武藤の後ろに隠れて顔を伏せている。
林が武藤の前まで来た。
「女！こい！！」
そう言いながら、手を伸ばした。麻美にその手が触れそうになった瞬間、
「うっ！」
という声が聞こえた。麻美が顔を上げると林の動きが止まっていた。
林の顔を武藤が掴んでいる。
「何してんな！離せや！！」
林は顔から武藤の手を引きはがそうとするが、まったくはがれない。
「君がした事は許されない、無理矢理に女の子を自分の物にしていた。僕には君を裁く権利はないけど、これから被害者が増えないように力は奪わせてもらう」
ただならぬ気配を、林はその身に感じ取り、恐怖で顔をひきつらせている。
精一杯の声を振り絞って言った。
「テメェは神かよ！！」
武藤は表情を変えずに、応えた。
「そうかもな」

そう言った直後、林は床に膝からガクッと崩れ落ちた。
「先生…どうなったんですか？」
麻美は今起こった出来事を理解できていない。
「死んじゃったりしてないですよね？先生…」
その問いに武藤は笑顔を見せた。
「大丈夫、気絶してるだけだよ、もうすぐ目覚める」
「よかった」
それを聞いて安心した麻美は胸を撫で下ろした。その時、
「先生、麻美ちゃん、私…」
理恵が二人を見つめていた。
「ここ、どこ？」
牧野志保も意識が戻ったようだ。麻美が泣きながら二人に駆け寄った。
「よかった！元に戻った！」
「私、確か、あいつに掴まれて…あかん、何も覚えてない」
理恵は苦笑しながら言った。
「先生が助けてくれたよ」
麻美がそう言うと、理恵は武藤に目をやった。
「う～ん、よくわからんけど、先生、助けてくれてありがとう！」
理恵の後ろにいた牧野志保も何がなんだかわからないといった様子だが、
「先生、ありがとう」
と感謝していた。
「いえいえ、どういたしまして。それより、佐藤さん山口さん、なかなか信じられない話しかも知れないけど、牧野さんは彼に操られていただけで自分の意思じゃなかった。君達はそのことを知った。急に変わったことで他の子は変な目で見るかも知れない…君達が支えてあげてね」
武藤は二人の目を見つめながら訴えた。
「はい」

理恵と麻美は声を揃えて答えた。
「もちろんですよ先生、友達ですから！」
理恵は親指を立てて言った。麻美も大きく頷いている。
「っていうか私も操られてたんですね、たぶん」
理恵は笑いながら言った。
「ありがとう」
志保は嬉しそうに笑顔を見せた。
「あと、僕がしたことは…」
「秘密ですね」
麻美は言った。
「えっ、先生何したの？」
理恵は興味津々だ。
「えっとね、顔をガシッ！てやってね」
「おお～！」
盛り上がる女子達。
「そんなミステリアスな先生も素敵です」
理恵が言うと
「右に同意です」
麻美も続いた。武藤は安堵の表情をしてから言った。
その時、林が目を覚まし起き上がった。
理恵、麻美、志保はみな鬼の様な形相で一斉に林を睨みつけた。
その視線に、林は逃げる様に走って階段を降りていった。
武藤はその様子を見てから、３人を見て言った。
「え～っと、じゃあ、帰りましょうか？」
「は～い！」
声が揃っている。
「今度、先生の秘密教えてくださいよ～」
理恵が肘で武藤をつつきながら言っている。
「う～ん、考えときます」
武藤は笑いながら応えている。

それから女子3人は駅までの帰り道、喋りっぱなしで笑いが絶えなかった。
武藤はそれを微笑みながら見ていた。こうして、大学内で起こった出来事は無事に解決した。

二日後、武藤の授業には理恵、麻美、志保が仲良く出席していた。
授業が終わり、3人は武藤な元に来て喋りかけてきていた。
武藤も応え、楽しく会話をしていたが、ある男子生徒が前を通りかかった時に言った。
「清田君」
そう呼ばれた男子性は、突然呼ばれて驚いていたが
「はい」
と返事をした。
「ちょっと話しがあるので後で教員室に来てもらえるかな？」
何の用があるのか、訳が解らなかったが清田は
「わかりました」と応えた。
「え～、先生喋ろうよ～」
理恵が駄々をこねだしたが、
「ほら、次授業でしょ、早く行かないと！話しはまた今度ね」
と言って武藤は教室を出ていった。
そして、休憩時間が終わった頃、清田は教員室をノックしていた。
「はい」
中から声が返ってきた。
「清田です」
「どうぞ」
その返事を聞いて、清田は、武藤真一と名札がついてある部屋に入った。

脳力

「どうぞ。あっ、椅子座って！」
パソコンを操作する手を止め、武藤は立ち上がった。
テーブルがあり、椅子が４脚あった。おそらく、生徒達の訪問時の為のものだろう。
「えっと、紅茶と炭酸どっちがいい？」
武藤がペットボトルの飲み物を手に聞いた。
「すいません、じゃあ、紅茶いただきます」
紙コップに紅茶を注ぎ、武藤が向かいの席に座った。清田は、一口紅茶を飲んでから口を開いた。
「あの、僕に何か用ですか？」
少し沈黙したのち、武藤は話し出した。
「単刀直入に聞くけど、清田君。君、力を持ってるね」
清田は目を見開いて驚いた。
「えっ、力ですか？」
焦りの表情は隠しきれていない。
「隠さなくて大丈夫だよ。僕は、力について知っている。君が力を持ってることは、わかるんだ。僕も力を持っているからね」
清田は、さらに驚きの表情を見せた。そして観念した様に話し始めた。
「はい、持ってます。力っていうのは、手に熱を集中させたりするものですよね？」
「そうだね、そういう使い方もあるね。ただ、この力は多様性にとんでいるからね。使う者によっていくらでも形を変えるんだ。君にも、自分だけの力の使い方があるはずだよ」
「自分だけの使い方ですか…」
そう言うと黙り込む清田。その姿に武藤は見覚えがあった。
「苦しかった時、君も何かを望んだはずだ。君も気付いているんじ

ゃないかな」清田が武藤の顔を見つめると、優しい笑みを浮かべていた。
「そうですね…。僕は、力を求めていました。でも、その、使い方？はよくわかりません」清田は、コップに入っている紅茶を飲み干した。
「まあ、心配しなくても大丈夫。すぐに出来るようになるよ」そう言いながら、清田のコップに紅茶を注ぐ武藤。
注ぎ終わったのを見てから、清田は気になっていた事を聞いた。
「あの、先生は僕をなぜ呼んだんですか？」
「ちょっと、学校で事件があってね。力を持ちながら、使い方を誤っていた子がいた。最初は、その彼と君に力を感じていたから、じっくり観察しようと思ってたんだけど、彼の力の使い方は酷かったから、やむなく力を奪った。そこで、被害が起こる前にこちらから動くことにした。君がどう力を使うつもりなのかを聞きたいんだ」
清田は困惑の表情の浮かべている。
「あの、僕は自分の体調を整える為になるかなと思って、訓練というか、いろいろできたらなと。なので、使うということだったら、自分が前に足を踏み出す為に役立てたいです」
それを聞いた武藤はニコッと笑顔を見せた。
「そう。それは、良い考えだね。うまくコントロールできれば、可能だよ。教えるというか、アドバイスすることはできるよ」
「本当ですか！？」
武藤は頷き、笑顔のまま少し小さな声で聞いた。「僕らの仲間に入るのはどうかな？」
「仲間…ですか？」清田は沈黙した。
「うん、力を持つ者が集まって作った集団があるんだ、ちなみにこの力のことを僕らは脳力と呼んでる」
「あ、あの、ちょっと考えさせて下さい。まだ、自分のことで精一杯なので。すいません」清田にはまだ、そんなにいろいろなことをする余裕はなかった。少し興味は惹かれたが、胡散臭さも感じてし

まったのも事実だ。その為、即決とはいかなかった。
「いや、いいんだよ。それは考えてもらって。それに、集団関係無しにアドバイスはするからね」
「ありがとうございます」
「うん、今日は来てくれてありがとう。それにしても正直、こんなに近くに力を持つ者がたくさんいたのには驚いたよ～」
清田も驚きの表情で応えた。「僕も、自分以外にこの力のことを知っている人がいて安心しました。これからもよろしくお願いします」
「こちらこそ、よろしくね。」
「それじゃあ、今日はこれで失礼して…」
「うん、ありがとう」教員室を出た清田は、部屋にいる時にポケットで震えていた携帯を取り出した。液晶の表示には、ハンちゃんの文字。
メールを開くと、「かず君、授業かな？私は、今一階にいるよ～。暇なら来てね」と書いてあった。
清田は、エレベーターで一階まで降りた。
エレベーターが開くと、ちょうど正面にハンナが見えた。椅子に座って四人で話していた。
近くに寄ると、見覚えのある顔だ。
ハンナが清田に気付いた。「あっ、かず君！授業は？」
「ううん、無いよ。今、ちょっと先生と喋ってた」そう言いながら、他の三人にも目をやった。
彼等は、ハンナと一緒に行った留学生の集まりにいた面々だ。確か、中国の孫さんに台湾の程くん、韓国のキムさんだ。「こんにちは」清田が挨拶すると、彼等も「こんにちは～」と返した。清田のことを彼等も覚えているみたいである。挨拶を終えると、キムさんが話し始めた。「さっきの話しだけど、恐いよね」「うん、恐い～」ハンナが応える。「えっ、何の話し？」清田は興味津々に聞いた。ハンナが眉間にしわを寄せながら言った。「韓国で殺人鬼が出たみたい。しかも、私達の住んでる地域だから心配で…」「さ、殺人鬼！

？それは恐いね…」「あと、なんかね、寮の近くで痴漢がでたみたいだし」「えっ！そうなん？それも恐いね。気を付けて帰らないと」「そうだね」ハンナも不安げだ。その時、後ろから声が聞こえた。「あっ、ハンナちゃん！」ハンナが顔を向ける。清田も振り返る。「理恵ちゃん！あっ麻美ちゃんと志保ちゃんもいる～」ハンナが手を振りながら言った。それから、新たに加わった女子3人を含め、清田と程くんを置いてけぼり気味のガールズトークの様相をみせ始め、笑い声が絶えなかった。

電車内の激突

社長室で深沢は、ニュースを見ていた。深沢の向かいの席に男が一人、さらにドア付近に秘書の古賀がいた。
あるニュースが流れた時、深沢と男が画面を注視した。
「今朝、東京都港区に本社を置く、大手下着メーカー、ルーライン社長の大迫一郎さんが自宅で死亡しているのが発見されました」
そのニュースを確認するとテレビを消し、深沢は話し始めた。
「今見てもらった事件を起こした犯人を連れてきてもらおうかな」
「はぁ～」
男は緊張した面持ちを崩さずにため息の様な声を漏らした。
「そう緊張しないでくれよ。連れてくるだけなんだから」
「あっ！はい！！すいません。わかりました」
「うん、頼んだよ。さっ！行ってくれ、もうすぐ新大阪に着くころだよ」
「はい」
男は立ち上がり、お辞儀をしてから部屋を出ていった。
「大丈夫なのか？彼は。まあ、彼が消えてもどうって事ないが」
笑う深沢を古賀は無表情で見つめていた。

新大阪の駅には、まだ新幹線は到着していなかった。
売店で飲み物を買って一気に飲み干した時、ホールに新幹線が入ってきた。
「おっ！来た！！どんな人かな？えっと、特徴が金髪の体がゴツイだったな」
新幹線から人が次々に降りてくるが、そんな人は見当たらない。そして、降りてくる客はいなくなった。だが、男の顔に焦りの色はなかった。そして、振り返ると降りた集団の客の後を追い掛け、声を

かけた。
「勝手に行かれたら困ります。案内しなければならないのに。」
すると、客の中の一人がその場で足を止めた。
「ふん、中にはまともな奴もいるみたいだな」
そう言いながら駅員の格好をした男が振り返った。
その瞬間、案内係の男は驚いた表情を見せた。「外国人だったのか…、そ、それにしても酷いじゃないですか、変装とかして。あっ、言葉わかります？」
「ゲームだよ。わからなければ、それでも良かった」どうやら、話せるようだ。それを聞き、ため息をつきながらも案内係の男は、自己紹介した。
「僕は吉岡直樹です。よろしく」
「俺は、トムだ」
「じゃあ、行きましょう」
二人は地下鉄に乗り移動を始めた。
「あの、日本は初めてですか？」座席に座っている吉岡が立ったままのトムに聞いた。
「いや、何度もある。１０くらいか」
電車は次の駅のホームに入っていった。そこで、多くの人が乗ってきた。吉岡の右隣に若い茶髪のカップルが左隣には赤ちゃんを抱いた女性が座った。若いカップルの男は座ると、目の前にいる駅員の格好の外国人を発見し、彼女と爆笑している。「何やねん、コイツ。アホやな」
「キモい～、何かめっちゃこっち見てるし」
二人の会話は、吉岡にもトムにも聞こえていた。吉岡は心配になり、トムの顔を見た。トムは笑みを浮かべながら、二人を見下ろしている。吉岡は、さらに心配になった。いや、嫌な予感がして緊張してきた。と、その時、電車が揺れた。トムは、女にもたれかかる様に倒れた。そして、起き上がり際に女の頬を舐めた。「きゃあ！！！！」女が短く叫んだ。「テメッ！、何してんねん！コラ！！！」男

がトムの脚を蹴った。さらに、起き上がり胸ぐらをつかんだ。男は体格がよく腕力には自信があるタイプに見える。トムは何も言わない、まだ女を見ている。男はキレた。トムの顔面に拳を叩き込んだ。
「コイツ、でかいだけやな。しょうもな。ボコボコにしたろ」
男が激昂していても、トムは気にも止めていない。今度は、おもむろに女の胸を掴んだのだ。
「殺すぞ！！！」
男がまた殴りかかった。
吉岡は止めに行こうと立ち上がった。その時、トムが言った。
「ゲームのスタートだ」
そう言うと、男の飛ばしてきた拳を掴んだ。
次の瞬間、男は体を一瞬ビクッと踊らせて座席に座りこんだ。さきほどから始まったこの騒ぎに、周りの乗客も気付いているが、何が起きたかはわからなかった。しかし、ただ一人、吉岡は顔面蒼白になっていた。電車は次の駅のホームに着いた。ドアが開く、何人かが駅で降りていく、目的地の人もいるだろうが、この騒動に恐怖を感じて降りた人もいるだろう。入れ代わりで何人かが乗り込みドアが閉まった。
「なあ、どうしたんよ？」女は男の体を揺すっている。女は男の顔を覗き込んだ。「ひぃ！！！」女は驚いて跳びはねる様に横に動いた。男は吉岡の方へ、だらんと仰向けに倒れた。白目を向いていた。
「うわぁぁぁ〜〜！！」
トムの周りにいる乗客達が叫んだ。すぐ横に別の車両に行くドアがある端の場所であり、さらに、多くの人がいる為、車両の逆の端にいる人達からは見えないが、何か大変な事が起こったことは、悲鳴によりほとんどの人が感じ取っていた。
「トム！なんてことを！！」吉岡は怒気を含んだ声を発した。しかし、トムは笑みを消しさる様子はない。そして、ゲームという名の惨劇は終わらなかった。
「何人生き残るかな？ハッハッハッ！」大声で笑うトムを見て、吉

岡は身構える。甘く見ていたのかもしれない、目の前にいるのは、殺人犯であり、そして何より…脳力者である。こういう事態は十分に想定しておかなければいけなかった。
「グッバイ」トムは吊り革を持ち、そう言った。
次の瞬間、乗客の多くが一斉に倒れた。胸を押さえながら、痙攣している人もいる。
「加減してやったんだ、根性見せろよ。ハッハッハッ！！！」
「トム！！！」吉岡が叫んだ。その時、隣にいる赤ちゃんが泣き出した。「オイ！うるさいぞ！そうか、すぐに泣かずにすむ様にしてやろう」トムは、赤ちゃんに手を伸ばしていく。母親は恐怖で体を震わせながら、赤ちゃんを抱き抱えた。手が後頭部に触れそうになった、その瞬間、吉岡はトムの腕を掴んだ。
「やめろ！」
トムの表情が一変して不機嫌そうになった。
「邪魔をするな。お前も死ぬことになるぞ」
「関係ない人を殺すな！！これ以上するなら、止めるしかない」
トムは、笑い声を一度あげた後、冷酷な目をして言った。
「お前もゲームオーバーだ」トムは掴まれた腕から力を流しこむ。
バリッ！という音が響いた。吉岡が座席から前のめりに倒れていく。
「お前には、加減はなしだ」
「わぁぁぁぁぁぁ！」
先程、体に異変がなかった数人の乗客が叫んだ。　「今度こそ、終わりだ」
トムが手を赤ちゃんへ伸ばした。その時、車両中に叫びが響いた。
「あああああ！！！」トムのものだった。
すると、下の方から声が聞こえた。「やめろと言っただろ」
トムは、激しい痛みを感じながら下を見た。
そこには、片膝をついたままの姿勢でトムの右の足首を掴んでいる吉岡がいた。
「お前！死んでなかったのか！！」

そう言うと、左足で吉岡を蹴り飛ばした。
「許さない…お前はもう許さないぞ！！」
バチバチッ！！！という激しい音がトムの体の周りから聞こえる。
段々と、青白い光りが見えてきた。それは、雷の様である。ニヤリと笑みを浮かべ、立ち上がった吉岡に突進した。
「死ねぇ！」
右拳を吉岡目掛けて振るった。吉岡は拳をしゃがみ込んでかわし、トムに抱きついた。
「がああああああ！！！！！！！」
トムは聞いた。この激痛の原因の音を…。ジュッ！という音を確かに聞いた。
「お前も力を持っていたのか！！」
床に崩れ落ちたトムが吉岡を見上げた。トムは、驚いた表情を見せた。吉岡の体全体を青い炎が見えたからだ。それは、一瞬で消えた。
「腕や脚の神経を燃やした。もう力も使えない。終わりだ」
「くあああああああ！」
その時、電車は目的地のホームに到着した。
同じ車両の数人はドアの開くのと同時に飛び出ていった。吉岡は、ドアに向かって歩きながら言った。
「深沢には言っとく、トムさんは途中で帰ったってな」
駅のホームが大勢の人で騒然とするなか、吉岡は改札を通った。

悪意渦巻く集会

ドンッドンッとドアを叩く音が聞こえた。
次いで、ガチャとドアノブが回り、ドアが開いた。
「おぉっ！？」
清田は思わず声を出してしまった。部屋には、すでに人が集まっていた。結構な数の人数がいる。ざっと見て、３０人くらいか。
「これで、え～、揃いましたかね？うん、揃ったね」
深沢がそう言うと、手をパンッ！と叩き、椅子から立ち上がった。
「諸君！暑い中、よく来てくれた。この日を迎えられて、私は嬉しいよ。今日、今から、この場所から、私が社会を、いや…日本を統制する！！」
深沢の宣言に何人かが驚きの表情を浮かべている。清田もその一人だ。
「君達は、そこにいたるプロセスに欠かせない、貴重な人材である。非常に期待している。しっかり、働いてくれよ」その時、すっと一人の男が立ち上がり言った。「あんたの計画なんてどうでもいい。ちゃんと報酬さえもらえればな。条件次第で動く」「もちろん、報酬は半端なものにする気はないよ。それは心配しなくていい」それを聞いた男が座るのを確認し、深沢は再び話し始めた。「これからの行動については、各自に連絡する。いずれ、合同で動くこともあると思う。それでは、今日はこれぐらいで解散としよう」座っていた面々は立ち上がった。すると、深沢の正面にいた男が部屋中を見回してから聞いた。「深沢さんよ～、トム・マッケンジーはいないの？奴もいると思ってたんだけど。あの殺し屋が日本に来てるって聞いて、絶対ここに来るなと思ってたんだけどなぁ」
「あぁ、来る予定ではあったんだけどねぇ、用事が出来て帰ったらしい。彼とは連絡が取れなくなってね。ねっ！吉岡君」深沢は窓際に立っている男に同意を求めるように言った。吉岡と呼ばれた男は、

小さく頷いた。
「ちっ！面白くねえな。どんな奴か確かめたかったのによ。恐くなって逃げたしたんじゃないか？まあ、そこまでの奴だったってことか」そう言うと、男は部屋を出ていった。
部屋から続々と人が出て行った。清田は、エレベーターであの面々と顔を会わすのは緊張するし、嫌だったから残っていた。部屋を見渡して確認してみる。「あっ！」そこには、見覚えのある顔があった。部屋の奥の隅に前にビルの入口ですれ違った男と少女がいた。
「やっぱり彼等も来てたんだ」再度、部屋を確認する。あとは先程、吉岡と呼ばれた男だけになっていた。そして、深沢と秘書の古閑。小さく息を吐き、何気なく向けた視線が深沢の視線とぶつかった。
「どうした、清田君？一人だと緊張したかい？」深沢は笑みを浮かべて言った。「ええ、人が多くてびっくりしました」「そうか。でも、これでびっくりしてたら仕事にならないよ。頑張ってくれよ」
「はい」「それでは、私は失礼するよ」そう言って深沢は部屋を後にし、古賀もそれに続いた。清田もそろそろビルを出ることにした。部屋から出て、エレベーターに乗り、一階のボタンを押した。その時、吉岡が乗り込んできた。扉が閉まり、エレベーターが動き出した。「あの、緊張しましたよね」吉岡が清田に話し掛けた。「あっ、はい。人があんなに多いとは思ってなかったですよ」「ですね」頷きながら吉岡も同意した。「いろんな人がいましたよ。有名人とかも。見ました？」「いえ」清田は興味がありげな表情を浮かべながら聞いた「見る余裕がなくて。どんな人がいたんですか？」「ほら、さっき深沢さんに話し掛けてた男いたでしょ。あれは、俳優の牛尾コウスケですよ」清田は驚いた「えっ！そうだったんですか！あの人気若手俳優の！？」吉岡は頷いた。「あと、僕も驚いたんですけど1番後ろに帽子を被っていた女がいたんですけど、あれはたぶん、モデルの藤堂ユリです」
「ええっ！あのユリっぺですか？」藤堂ユリは、２０、３０代の女性に人気の雑誌ＱＵＥＥＮの専属モデルである。「え～」清田はま

だ素っ頓狂な声をあげている。「近くで顔を見たから間違いないと思うよ」「そうですか…、なんか複雑な気持ちです。彼等に裏の顔があったなんて」「そうですね…」二人は残念そうな表情を浮かべながら顔を見合わせた。その時、エレベーターが一階に到着した。一階のフロアに出て、清田は吉岡に言った。「あっ、僕はちょっとここで休憩してから帰ります」近くのソファーに手をかけていた。「そうですか、それでは僕は帰りますね。また、会いましょう！たぶん会うでしょう、何となく」「はい！そんな気がします」「それでは、さようなら」吉岡が右手を挙げて合図をし、清田も同じようにして応えて別れた。清田は、ソファーに腰掛け、肩から斜めに掛けていた鞄から清涼飲料水入りのペットボトルを取り出し喉を潤した。携帯を開き、ニュースを見た。今日も、日本全国では様々な事件が起こっていた。「ネット犯罪に、青年が暴行され重体。はぁ…」まだあったが読むのをやめた。

そし

て、スポーツ情報を見ようとした時、足音が聞こえたので顔を上げると、あの男と少女の二人だった。男が軽く会釈をしたので、清田も返した。横にいる少女にも視線を向け、笑顔で会釈した。「こんにちは」少女は少し照れた顔をしながら言った。

「あっ！こんにちは！！」応えてくれたことに少し驚いたが、嬉しくて清田は挨拶を返した。

「今日は、一人ですか？」男はその場に立ち止まり聞いてきた。

「はい、用事があるみたいで…」男は頷いた。そこで会話が途切れてしまい、少し沈黙の間ができた。

「えっと…あっ、そうだそうだ！さっきの人達の中に有名人とかいたみたいですよ」このフレーズに賭けた。

「そうなんですか？やっかいな事になりそうですね」反応は上々かな？と思いながら続ける。

「ですね。後は、あの殺人鬼が来る予定だったのもびっくりしまし

た」「あぁ、用事で帰った殺人鬼ですね」男は少し笑いながら言った。「でも、殺人犯を入れるとはちょっと…」
男は清田を見つめて少し間をあけてから言った。「彼にとっては、あなたたちや僕たちと同じで、実績をつくる為の行為だったんじゃないですか？」清田は驚いた。
「殺しが実績！？そんな！」
「僕たちがやったことも重罪ですよ」
「でも、人殺しは酷すぎる…」
「まあ、あんな組織じゃ、何がいてもおかしくないとは思いますが」
「ですね…」まったくだと清田は思った。「あの…」清田は少女をちらっと見てから質問した。「その危険な組織に入るにはそれぞれ理由があると思いますが、あなたたちは？」
男は苦笑いのような表情を浮かべる。「それを聞きますか、あなたたちの敵かもしれませんよ？」
「僕たちは組織を潰そうとしてます！」
清田の思わぬ発言に男は驚いた表情を見せたが、一瞬間を置いてから男は笑った。「面白い人ですね、あなたは」男は清田の顔をじっと見つめた。
「それだったら、あなたたちとは戦わないですみそうです」「えっ！？」
「僕たちも組織を…深沢を潰すつもりですから」「そうなんですか！よかった～」安堵しながら清田は喜んだ。その時、清田の携帯が震えた。つい先程から三回目の震えであったので、これは取らないといけない震えだと思い携帯を開いた。「あっ、ちょっと用事ができたんで、僕行きます。話せてよかったです」男は頷いた。立ち上がった清田に言った。
「じゃあまた、どこかで近いうちに」
「はい」そう清田は言うと、ビルの入口に向かって歩いていった。
その姿を見送っていた男と少女。入口付近まで行った清田の背中を見ながら少女は言った。

「あの人、いい人だね」そう言った表情は少し寂しそうでもあり、悲しそうでもある。
「うん、そうだね。…いい人すぎるかも知れない。これからたぶん、大変なことが起こっていく。それを乗り越えていくには甘い。キャラメルマキアートぐらいにね…」
「それはよくわかんないけど」少女は苦笑するしかなかった。
「でも、嫌いじゃないけどね」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5798m/

のうりょくしゃ

2010年11月5日08時26分発行